

【背景】健康教育プログラムはセグメント化することでより大きな効果が期待できる。大学生に適した報提供や学習スタイルに関するニーズ評価は、このセグメントへの介入を考える上で重要な意味をもつ。

【目的】中部大学人文学部コミュニケーション学科(愛知県春日井市)の学生に健康教育プログラムプランニング戦略の要であるニーズアセスメントの流れを学習させることを primary objective とした。①フォーカスグループの技法を体験と、②ヘルスメッセージの批評、③HIV/AIDS 啓発教育を secondary objectives とした。今回はこの②と③で得た情報を共有したい。

【方法】大学3・4年生と市民聴講生(N=26)に既存 HIV/AIDS 啓発パンフレットの批判をフォーカスグループインタビュー形式で行わせた。質問項目は accessibility, availability, affordability の点から著者があらかじめ起こしたものを用意した。

【結果】学生からは「必要だと思われる情報を自ら見つける」という能動性が求められる学習スタイルは好評であった。また、自身がいかに関心がないかを気づかせることができた。

大学生にとってパンフレットという媒体は情報入手経路として馴染みがないという意見が出た。大学ホームページのトップページにリンクを載せることや、講義という経路がより好ましいと捉えていた。また、文章表現や医学情報の難易度が高すぎる点や、行動に移すための「足がかり」となる情報の少なさも指摘された(表1を参照)。

【結論】大学生という対象オーディエンスには、読解力に配慮した基本的な健康情報に加え、対人関係における経験の浅さを考慮して、沈黙を破るための会話術やシナリオの提示が必要であると考えられる。

授業後この問題に関心をもった学生が使用できるフォローアップ情報の少なさが課題として残った。次年度の授業は、この点も考慮して、このセグメントに特化した情報量の多いヘルストピックへの変更も視野にいれ授業計画を立てるべきかもしれない。

大学名掲載をご了承いただき中部大学人文学部コミュニケーション学科教授柳谷啓子先生に深謝する。

プログラム開発、コミュニケーション教育、大学生教育に携わっている方の参加をお願い致します。

(連絡先) 平田亜紀、受信専用 E-mail: ah2138@columbia.edu

表1. HIV/AIDS 啓発教材開発に対する学生の意見の抜粋(in-vivo code)

カテゴリ	「インタビュー解答例」
情報入手経路について	「(パンフレットは) 手にとるのが恥ずかしい。」 「(難易度が高すぎて) 1人で最後まで読めそうにない。」 「大切なんだろうけれど、関心がないから授業で無理やりやってもらえると助かる。」 「(授業でセクシュアリティなどについて扱うのは) 高校(生)のときは恥ずかしかったけど、今なら真剣に考えられる。」
コミュニケーションの「足がかり」に関して	「よく“話し合いましょう”っていうけど、どう話し始めて(セイファーセックスに)同意がもらえるのか教えてほしい。」 「受け身じゃなくて女の子から(会話を始めることが)できるとか、そういうのの具体例がほしい。」